



南へ

がむしゃらにネイから逃げることにしか考えられない、クロマオー。
息は切れ、もうだめだと思うが、ネイは結構しつこい。
すこしでもやなこと言うと、ずっと覚えてたりするし、ネイはしつこい。
しつこい。
心にへばりつく気持ちはネイそのものなんだ、きっと。

「こっちよ！」

突然腕を引っ張られ、横道に連れて行かれる。ずっとネイのことばかり考えていたクロマオーは、ぼんやりと腕に従った。どこへ行ったって良かった。ネイから逃れられるなら。

クロマオーを引っ張る指は青く、同じマゾクの肌だった。後ろ姿をよく見れば、知っている。
ラタームの所の女の子だ。
綺麗な女の子だとずっと思ってた。

二人は南に向かっていて。走り続けることが出来ず、立ち止まると、長い綺麗な髪から小さな可愛らしい顎が見えた。
灯りもない場所で、その目だけがやけに輝いて見えた。

「きみはどうしたの。」

クロマオーはやっとそれだけ言った。ネイが、どこかで拗ねたような顔をしている気がした。胸が締め付けられる。

話せる相手なら誰でも良い感じで、この子だから話す訳じゃない。ネイちゃん、分かってね。

「ポチギもラタームもないのよ。私、逃げて来たわ。他にもちりじり逃げたけど、みな方向が悪いわ。電波塔が立ってる方には逃げるべきじゃないのに。」

「電波塔？」

「北は主に富裕層から一般が住んでる街があるから、マゾクが逃げ出した時に電波で爆破出来るようになってるの。治安の為ね。でも南まではまだお金が回ってないし、そもそも貧困層が住んでいる所だから、整備されてないの。」

「この首輪か。」

「そう。とりあえず南に逃げれば、元の主が200m圏内に入らない限りは爆破されないわ。まさかラタームが南に来るとは思えない。逃げ切れるわ。ただし生きる道はないけど。」

そう言ってすこし震えた彼女。
孤独なのかい、と訊く代わりに名前を尋ねる。

「私、ミゾッフオイ・サルコ。昔はこれでも由緒ある家柄だったの。あなたは、クロマオーかしら？」

「そうだよ。」

「知ってるわ。私の方がすこしお姉さんね。」

クロマオーは当時小さかったから、サルコという家は知らなかった。しかしミゾッフオイはやはり王族のことは知っているらしい。

「誰もがあなたに気付いているけど、係わることがすこし怖い。だってあなたはきっと、それだけの力があるからよ。」

ミゾッフオイは長い脚を折りたたんで座り込み、こちらにくしゃりとした笑顔を向けた。空にはリンデリンデが、位置を変えてきらめいている。

「ミゾッフオイ」

「あなたにある力は、希望とも言えるわ。さあ、行かないとね。」

倒れるまで、と腕を引かれる。
倒れるまで生きるだけ。

ミゾッフオイ

そして辿りついたのは、灰色の煙が絶え間ないゴミ処理場。
疲れきってフラフラと座りこむと、横には空き缶一つこぼれ出て、ミゾッフオイは長い足を情けなく折り曲げる。
もうこれ以上どこにも行けなかった。

ミゾッフオイは、後ろで束ねた髪絡まりを直し始めた。どうせ直した所で、誰に見せることももうないのだ。
悲しそうに見える、日常の姿。

空はまだ暗く、朝が来るのはずっと先のようだ。空腹と、焦りのせいで喉がかわく。星は大きく、今にも落ちてきそうに尊大に輝いた。クロマオーは委縮し、体を小さくする。

「ミゾッフオイ、きみはどうすべきか分かるの？」
「分からない。ただもうこの先は大きな森で、ずっとその先に、マゾクが昔暮らしていた場所があるの。私達は皆そこから連れてこられたの。帰りたい……。」
「今更帰って何があるの？」

冷たい気持ちになって呟くクロマオーを、ミゾッフオイは寂しそうに見つめた。まるで分からない人に分からないことを噛んで含んで教えるように、彼女は故郷だからと、囁いた。

思えばそこに、きのうとハイマオーの亡骸が眠っている。

あの時、クロマオーはフォーに選ばれたと感じ、
それがすごく嬉しくて、
ハイマオーを哀れに思った。

しかしあの時から何の成長もしておらず、ただヒヨコを運ぶだけの日々。
ハイマオーを選んでいればきっと、マゾクはドレイではなく、
クロマオーであったからこそ今みんな苦しんでる。
少しずつ下がる首と、胸には痛みが蓄積する。

しかし僕には力があるのだ、クロマオーは顔を上げる。

ずっと雨は友達だと思っていたのに。

「クロマオー、お願い。」

青い肌が暗闇に浮かび上がるようなミゾツフォイが、神様に祈るように半分縋りついて言う。

「私達をみんな、おうちに帰して。帰りたい。あなたなら出来るよ……。」

クロマオーは即座に振りほどいた。

「今を何とかすることを考えよう。僕はもう、王子なんかじゃない。」

むしろ僕は……。

馬車の音が近くで聞こえて、クロマオーは口を閉じた。ごく近くで、止まる音もした。

「お嬢さんには顔を見られた。生かしてはおけないんだぜ。」

ミゾッフオイとクロマオーは咄嗟に身を隠した。馬車から降りて来たのは、黒づくめのいかにも悪そうな髭面の男たち。

高そうな服を砂まみれにした少女が、ゴミだめに投げ出された。

ヒトの子だ。どう見ても良い家柄の。

「お嬢さんの親は金をたんまり払ってくれた。有難いんだぜ。でもお前は生かしてはおけない。」

「苦しいのが良いか？」

「痛いのが良いか？」

「それだけは選ばせてやっても良いぜ。」

男たちは唱和するようにして、彼女に近づいた。彼女は震えた。母が結んでくれたのであろう髪はグシャグシャで、六歳くらいだろうか。幼いひとみを恐怖に揺らめかせている。知らないから、余計怖いのだ。

クロマオーは近場にあったパイプを握った。と、それより早くミゾッフオイが横にあった冷蔵庫を持ちあげた。

ミゾッフオイ、小声で呼ぶがもう。怒りだけで、もう。

ゴミ山に高く駆けあがり、ミゾッフオイは吠えた！

「天誅！」

ミゾッフオイは一人の男の頭上に冷蔵庫を落とした。かなり重い音がして、もう一人の男が股から何か漏れそうになったのか内股になった。クロマオーも追い付いて、叫ぶ。

「金は無事か？」すこし嘲笑うように。

男は分かりやすい反応で馬車を見た。その時クロマオーはパイプで足を狙った。渾身の力を込めたので、どうにかなったらしく、男たちはどちらも戦闘不能になった。

ミゾッフオイはヒトを助けて良いんだらうか、ちょっと思って振り向くと、彼女は必死で少女を抱き締めていた。

少女は青い肌を不思議そうに見て、それからミゾッフオイの目を見つめた。
そして何か分かったのかぼろぼろと涙をこぼし始めた。

クロマオーは特にすることもなく頭をかいた後、パイプですこし絵を描いた。

マゾクが昔、みなで暮らしていた頃読んでもらったお話の中のヒーロー。
マリエリパリを描いた。

マリエリパリは月に恋をしていて、いつも高い所にいたので、みんなが困っているのにすぐ気付いた。

いつだって助けに来るけど、マリエリパリは近くの誰かより、
月を忘れることが出来なかった。

やがて夢を見て月の方向に旅に出た。

マリエリパリが月に触れられたかは誰も知らない。

クロマオーはその絵を、自分がマリエリパリになったみたいに誇らしい気持ちで、描いた。

「私はポルカ。お姉ちゃんたちは、サーカスのひと？」



少女はミゾッフオイの手をつまんだまま、すこし身を引いて話しかけた。
サーカスのひと、確かにそのようなものだけだ。

「まあそのようなものだよ。」

「そうなんだ。お肌を青くしたりタイヘンだね！」

少女以外の二人は顔を見合わせる。もしかしたら、この女の子は。

「綱渡りするの見たことあるよ。」

「綱渡りはしないわ。ただ火の中には飛び込むけど。」

「僕は毎日ひよこ運ぶだけだよ！」

少女はグチャグチャな頭を揺らして笑いだした。

「お兄ちゃん、へんなこと言う！お姉ちゃん、すごいね！」

どうやらこの子は、マゾクというものをよく知らないようだ。

「ポルカちゃん、きみ、おうち分かる？」

「さむいところだよ。まつ毛がパキッと折れちゃうの。」

「この街じゃないの？」

「分かんないよ〜。」

「うむ……ミゾッフオイ、この街にそんなに寒い所あるかい？」

ミゾッフオイは難しい顔をして、何か思い出そうとしている。

この街がどれだけ広いのか、クロマオーはよく知らない。常識的に考えると、それほど寒い所がこの街にあるとは思えないが、この悪いやつらが一生懸命遠くまで少女を連れまわすとは思えない。

金だけ取ったら、すぐ片づけるくらいにしか能がなさそうだ。

「クロマオー、もしかしたら、東にある魚市場かもしれない。」

「何でそんな所に？」

「私、一度興行で行ったことがあるけどあそこは本当に寒いわ。ポルカちゃん、魚はよく食べる？魚いっぱい？」

「魚、食べる。うん、魚いっぱいだよ。帰りたいよ。」

何だか分からないがクロマオー以外の二人は納得したようだ。早速、と歩き出す。

「え、ちょっと待って。ミゾッフオイ、それってどういう。」

「夜が明ける前に、家の前まで送らないと。この子朝帰りになっちゃう。お父さん泣いちゃう。」

「まだ早いにも程があるよねって！違うよ、僕たちバレたら。」

「どうせ行く所なんてどこにも無いなら、せめて誰かを助けてほしいの。クロマオーだってその気で、この子に訊いたんでしょ？」

「ミゾッフオイ……分かったよ。」

きうううとお腹が切なげに鳴く。

やれやれと思いながら、風が吹くまま、三人は歩き出したのだ。

ポルカ・アップアップ

ポルカは立ってるだけでもフラフラだったので、クロマオーはポルカを背負った。
茶色の髪がクロマオーの顔の所まで落ちてきて、誰かを背負った時のことを思い出しそうになる。

「クロマオーはいつも顔隠してるのね！」

ポルカはクロマオーの白い部分を引っ張った。



「ああ！だめ！そこはいや！やめて！あん！」

「気持ち悪いわ！」

ミゾッフオイの王族に対する冷たい蹴りが決まった所で、三人はわるいやつらの馬車に着いた。どうせならを使ってやろうと思ったのだ。幸い仲間はいなく、積み荷がすこしあるだけだ。ポルカが誘拐当時持っていた本や、ヒヨコがよちよち歩いていた。ひときわ目立ったのはお金で、二泊三日程出来るだろうカバン二つに満タンに詰め込まれている。

「モカおいで。」

ヒヨコはポルカの手の上に乗り、ピヨッと鳴いた。立ち居振る舞いがメスらしい、とクロマオーは思った。

「モカは女の子だろう？」

「そうだよ。知り合いのお姉ちゃんがくれたの。ほら、この町で一番大きいネコハズイ工場のオーガスタお姉ちゃんが、ゆうこうのしるしにって。」

クロマオーは聞き流した。

ただ小さなポルカを持ちあげて詰み込み、自分の気持ちと一緒に馬車に蓋をした。

その頃ミゾッフオイはもう馬を手なづけ、出発出来る手はずを整えていた。

心では先ほど見たお金が、輝きをはなって見えた。あれだけあれば、自由を求める逃亡資金になる。

しかしポルカのお金だ。自分はわるいやつと同じにはなれない。

確かにドレイだった自分だけど、心まで汚すことは出来なかった。

「クロマオー、出発するよ。」

「お願い、ミゾ。」

「仰せのままに。」

馬車は軋むような音をし、ゆっくりと動き出した。

オープンザドア

ミゾッフオイによると、東にある魚市場はとても寒いらしい。
より詳しい話を聞きだしてみよう。

「ミゾッフオイ、東って雪が降るの？」

「どっちかっていうとおしなべて氷って感じ。何故かあそこのヒト達、冷蔵庫の中で暮らしてるの。こっちの街では、引きこおりって言ってて、社会問題にもなってるのよ。でもあの人たちがつくる、塩漬けがほんとう、神の出来よ。おいしいの。」

「引きこおりって聞いたことあるかも、新聞読まないけど。冷蔵庫の中から出てこないなんて、おかしいヒト達だね。」

「気難しいヒトが多いの。公演に行った時も、演出で黄色のリボン弾けさせたら、黄色は『そぐわない！断じて許せない！』って大騒ぎよ。黄色は燃える太陽を連想させるからダメなんだって。はああ……って感じ。」

ミゾッフオイの巧みな馬捌きで、ぐんぐん東へ東へと向かっていく。後部座席でゆっくりしているポルカは、そんなに気難しそうな感じではない。性格は遺伝はしないのだろうか。

「でもどうやって返すのさ、ポルカを。」

「家の前に連れて行けば、自分で帰るでしょう？」

「お金はどうするの……。」

「やっぱりクロマオーも考えてた？」

「正直もう腹ペコだよ。パン代くらいもらえないかなって考えるよ。労働には賃金だよ。」

「やだやだ、王族ともあろうものが……。」

そもそもパンを買う事が出来るのかも問題だ。

「ポルカに訊いてみる？パンくれないかって。」

「猫の子みたいね、私達。」

「ニャオーって、餌くれよーって？」

「どれだけ哀れっぽく鳴けるかで明日動けるか変わるわ。」

「やってみよう！」

ミゾッフオイはちょっとびっくりした顔をして、それから笑った。

やがて東魚市場に到着。

「ポルカちゃん、ポルカちゃん。」

声をかけると、ポルカは殆ど裸で寝ていた。どうしよう、放送禁止。

「クロマオー、暑くて。ここ暑いね。」

「気候は悪くないと思うけど、そうか。でも服着て。本当に朝帰りみたいな、オトナなことみたいなになっちゃうから。」

「クロマオー！！」

ミゾッフオイの王族に対する冷酷な突きが決まった所で、三人は馬車を降りた。

クロマオーはこほんと咳をしてから。

「ポルカ、うちはこの中かい？」

そこは白く、四角い、外壁すらも凍ってつららが出来ている、おそらくテーマパーク以上の大きさのある広大な冷蔵庫だ。

「分からない。ここ寒い？」

「すごく寒いよ。」

「じゃあここだ。ずっと寒いのは、私の家。」

ちょっと不安の残る受け答えだ。

「もしかしたら、ポルカはお家から出たことなかったの？」

「あるよ。でも外も寒いのは。ずっと寒い。」

「この中だよ、それずっと……。」

引きこもりって困ったな。

僕たち引きこおり！

「入って送り届けましょう。」

そう言うミゾッフオイの意見に押されて、門を上から乗り越える。空は段々、紫と青が深く混じった期待を感じさせる色に移り変わっていた。

扉すら、鍵穴から凍りついている。クロマオーとミゾッフオイは顔を見合わせた。

「ここを開ける時は忌むべき『ゆ』を使うってパパヨシ言ってた。」ポルカはちょいちょいと歩いてきて、脇にあったホースを手繰り寄せて来た。

「『ゆ』は、お名前には使われない言葉なの。断じて許せないってやっぱパパヨシ言ってたよ！」

ホースから出た紫と青の湯は、扉を四角い形に切り抜くよう溶かしていく。錆びた鍵穴が、顔を出した。

「えっと、どうするかっていうと……。」

「ポルカさ、おうちの鍵の開け方を僕らが知ったらまずいんじゃない？」

「それはパパヨシ言ってなかった。」

「パパヨシってだれ？」

「パパヨシはパパヨシだよ。お父さんだよ。」

クロマオーとミゾッフオイは良心から後ろを向いた。手にはそれぞれ、魅力的な身代金を持っている。このまま逃げたら、さっきの下等な奴らと同じだし、とりあえず誠意は尽くさねば。パン1個、欲しいだけなのさ。

「開いたよ！」

ポルカが扉を、氷をキシキシキシ軋ませながら開けた。中は一面銀世界……というより、

「し」

「ぬ」

ようやく2語口を動かせた時にはポルカは扉を閉めていた。（鍵も）

しぬしぬしぬ！寒いんじゃない、しぬ！出ようとするのにポルカがものすごい力で、中へ引っ張る。

ミゾッフオイの髪が凍って、クロマオーの服を突き刺す！見ると、ミゾッフオイも引っ張られて真っ青だ。

しぬし。

だめだし。

にくいし。

うっとおしい！

心も凍って、マイナスのことばかり浮かぶ。そりゃあ、引きこおりにもなる！

しかしポルカのどこからこの力があるのか、ぐんぐん前に進んでいく。

朦朧とする意識で、光が見えた途端、体全部を抱き締められてるような圧倒的幸福感があって、

「男と朝帰りだと！断じて許せない！」

パパヨシの冷酷な蹴りが決まり、クロマオーは崩れ落ちた。一応中は暖房がきいていた為、クロマオーは笑顔で倒れた。

本当の仲間

寒さで凍っていた髪だの布だのが、ほんわり溶けていく。

家の中は春の陽気で、パパヨシの周り以外は幸福そのもののぬっくぬっくだった。

パパヨシはひしっとポルカを抱き締めている。怨念を込めた目でクロマオーを見ている。

ミゾッフオイがようやくツッコミを入れた。

「あの……ポルカちゃんはさらわれていて。」

「知っとる！お前達あまりにポルカが可愛いからって！しかもっ、けっ……結婚を申し込みに来たのか?!」

「あの……。」

「さらっというて！お前ら！さらっというて好きになるなんて！どこのハーレクインだ！」

ミゾッフオイはちらりとクロマオーを見て、正にしれっとした顔をした。

「私とこの者は結婚を約束した間柄で、サーカスに勤めております。ポルカさんが一人ではここまで帰れないようでしたので、お連れしたんですよ。」

「けっ結婚！ポルカは遊びだったのか？」

「ですから、ポルカさんを危ない輩からお助けした。ただそれだけでございます。」

パパヨシは、般若の顔から恵比寿の顔になった。

「それはそれは……。」

「ポルカさん、もう大丈夫ですね。では失礼いたします。」

ミゾッフオイは踵を返した。もちろん、パパヨシは呼びとめる。

「何か、お茶でも……！」

もう一声！という内なる声がミゾッフオイとクロマオー両方から発せられた。現実には起きたのは、クロマオーの腹が大きくなった。

「ご馳走にいたしましょう！どうぞ！」

来た—————！

馴染むのと本当と

ポッカポッカのシチューと
ピッカピッカのライ麦パン

忌むべきおユを使わねば生きていけない。だからこそ憎らしい。
とパパヨシは歯嚙みする。

そしてフッカフッカのお布団。

体が溶けて、布団にしみ込んでいくようにクロマオーは眠った。
夢の中で、シロバンチョーや
ネイが出て来た。
どこだか、遠くの方にいた。

もしかしたらどこにも行けない自分の
居場所はどこなのではと思った。

目が覚めてすこし泣いた。

横のベッドに眠るパパヨシにバレないように目をこする。

僕はずっとドレイだったんだ。
それに優しくされていただけで
一緒じゃなかった、何も。

目覚めたパパヨシが背中をさすってくれた。
ポルカのことを好きになってしまったんだとか言ってた。
無視して
泣きたいように泣いた。

そのうちパパヨシも同情して泣き始めた。
ポルカがそんなに好きなら、あの子を何とかせんといかんよ
いかんよと泣いている。
ほどなく
何だか疲れてきてもう一度眠りに落ちた。

パパヨシは背中をさすりながら
俺は息子が欲しかったんだとか言っていたが
終始無視した。

再び落ちた眠りの中で
ポルカにひよこを手渡すネイが
こちらに気付いて手を振ってきた。

僕のカ（こと）、気付いた？
こわいって思う？
僕はきみが思うような
ドレイじゃないんだよ

きみに守られるくらい弱くなんてないんだ。

そう話しかけると
ネイは近づいて来て
手を上下に振る。

思わず頭を下げると
背伸びしたネイがクロマオーの頭を撫でる。
顔をあげたらネイと視線ががちあい
ネイの目がうるんでそして溶けた。

ネイちゃんに会いたって思って
たまらない気持ちだった。

マリエリパリが月に恋したように。

点描とクロマオーと。（9）に続く